荷

三年　画数 10　筆順 艹 芒 荷 荷　オン カ　クン に

成り立ち

人が〝にもつ〟をかついだすがたをあらわし、〝にもつ〟といういみをあらわした〝何（2年89）〟という字が〝なに〟といういみにつかわれるようになったため、これに〝艹〟をくわえて作った〝荷〟が〝にもつ〟のいみにつかわれるようになったものです。

〔荷は、艹と何との形声字で、〝蓮〟の本字である。蓮は〝はすの実〟を表した字であったが、〝はす〟の意味には専ら〝蓮〟が用いられ、〝蓮華〟〝蓮根〟などと使われ、〝荷華〟〝荷葉〟という用法が衰えた。一方、〝荷〟の本字である〝何〟が専ら〝なに〟の意味に用いられるようになったため、同音の〝荷〟を〝荷〟の意味に用いるようになったものである。〕

使い方

▽ぼくが電車の中で、ぎせきにすわっていると、大きな荷物を下げたおばあさんが、電車にのって来ました。大きな荷物を下げたかっこうが、大へんそうに見えたので、すぐせきをゆずりました。おばあさんは、あせをふきながら、にこにこして、「どうもありがとう。たすかりますよ」といいました。ぼくも、いいことをしたと思って、うれしくなりました。

▽おかあさんが、PTAのやくいんになりました。さいしょ、おかあさんは、「わたしには、荷がおもすぎるわ」といって、しぶっていたのですが、みんなにすすめられて、しかたなく、やくいんになったのです。

熟語例

▽荷物（もってはこぶもの。荷物をもってはこぶのは、めんどうですから、「やっかいなもの」といういみにも、つかわれることがあります。「あの子をつれていくと、お荷物になるから、いやだなあ」などというふうに、つかわれます。）

▽出荷（荷物をはこび出すこと。㊀「入荷」）

界

三年　画数 9　筆順 田 田 界 界　オン カイ　クン

成り立ち

人がものの間に〝分け入る〟形をあらわした〝介〟と〝田〟とを組み合わせて作った字で、「人が田と田の間に分け入る」といういみで、「田と田の間のあぜ道」をあらわした字です。

あぜ道が田と田の〝さかい〟になっているところから〝さかい〟といういみにつかわれます。例境界。

また、あぜ道によって田が〝かぎられ〟ているところから「限られたところ（はんい）」といういみにつかわれます。例視界、財界、政界。

使い方

▽ぼくは、おとうとといっしょに、一つの長いつくえをつかっています。まん中に境界線を引いて、おたがいに、それからはみ出さないように、とりきめをしています。

▽山にのぼって、きりにとりかこまれたことがあります。ある時には、こいきりがすっかりまわりをとりかこんで、なにも見えなくなるのですが、つぎのしゅん間には、さあっときりが晴れて、視界が広がるのです。それは、とてもおもしろく、ふしぎでした。

熟語例

▽境界線（あるものと、ほかのあるものとのさかいになる線。あるものと、ほかのものをへだてる線）

▽視界（目で見えるはんい）

▽財界（財政をとりあつかっている社会。たとえば実業家や金融業者などをいいます。「経済界」といっても同じことです。）

▽政界（政治の世界。政治にかんけいする人たちの社会。「政界の大立者」などというと、「政治の社会で一ばん重んじられている人」といういみになります。）